

「普通の人」がない世界

中 三

「何あの子、なんか変じゃない。」

こんな言葉を浴びせられたことがあなたにはあるだろうか。聞いたことはあるだろうか。またはあなたがこの言葉を他の人に浴びせたことはあるだろうか。そのような悪口、陰口を言われていると感じた障害のある人は世界にいる約十億人の内の五十九・四パーセント、約五億四千万人もいるということ、まずあなたに理解してもらいたい。

私には兄がいる。いつも元気で、喋ることやテレビを見ることが好きだ。ただ一つだけ、兄はみんなと違うところがある。それは障害があるということだ。兄は皆の成長のスピードについてはいけなかった。発達が他の人よりも遅かったのだ。たった一つ皆と違うだけで差別や軽蔑をされてしまう。そんな世の中が私はとても嫌いだった。

ある日、私と母と兄の三人で買い物に出かけた。私の兄は一人で歩くことができるため、スーパーマーケットの中を歩き回っていた。そのとき、高

校生の男女三人組が兄の方を見て、クスクスと笑い出した。そして「何あの子、なんか変じゃない。」と言った。私はその言葉を聞いて何もすることができず、ただ呆然と立ち尽くしたままだった。怒りや悲しみといった感情も湧かず、高校生が放った言葉が頭の中でこだましていた。言い返すことも、兄に寄り添ってあげることもできず、高校生の会話を聞いているだけだった。私はあのとときの私を今も嫌っている。

その出来事をきっかけに、私は障害のある人との関わり方について調べた。調べてみると、高校生がなぜあのような言葉を言ってしまったのか分かった気がした。インターネットの記事にはこう書いてあった。「人は分からないこと、知らないことに対して憶測で判断したり、勝手な解釈で決めつけたりする。また過剰に反応したり、異常な見方をしたり、偏見をもったり、差別をしたりしてしまふ。知らないことにはある意味怖いことだ。正しく理解して、正しく判断することが人としてとても大切なことである」と。これを見たときに「ああ、なるほど」と思った。人は、身の回りにいる普通の人ややらないような行動や格好をする

人に対して、差別をしてしまうことがあると聞いたことがある。これに障害のある人が当てはまってしまうから、悪口を浴びせてしまうのだ。ただこのとき私は「普通の人」とは誰なのだろうと思った。何不自由なく暮らすことができている人のことを言うのだろうか。では障害のある人は普通ではないのか。それは違う。そんなことがあってはならない。それこそが本当の人権侵害だと私は思う。そして「普通の人」など私はいないとも思っている。皆、平等なのだ。外見が違うのは皆、同じだ。性格も趣味も好みも全てが十人十色である。そう考えれば、障害のある人も健常者も同じ一人の人間だとは考えられないだろうか。悪口を浴びせたり、差別をしたりすることはなくなるのではないだろうか。皆がそのような考えをもつためには、やはり自分から「障害のある人」を正しく理解していくことが必要だと思う。それが差別をなくすための第一歩なのだ。実際、私は十五年近く兄と一緒に過ごしてきて、皆に接するのと同じように接している。私にとっては健常者なのだ。皆もそうあってほしいと思う。

障害のある人との関わりを改めて考えてみると、

まだこの世界には、スーパーマーケットで出会った高校生のような考えをもつ人がたくさんいる。そのような人が、今後どのような「考え」をもって障害のある人と接するのがよいのか分かった気がした。その「考え」を私に世の中に発信していかなければならぬ。そう思った。そして誰もが差別なく、傷つけず、皆で支え合える、そんな世界にしたい。それを実現するためにあなたにも協力してほしい。

「普通の人」がいない世界を目指して。